

市民講座を まちづくりに生かす



ぎま みつお
儀間 光男
うらそえ
浦添市長(沖縄県)



さど ひとし
佐渡 斉
よつかいどう
四街道市長(千葉県)



ただ しげみ
多田 重美
やしお
八潮市長(埼玉県)



あべ さんじゅうろう
安部 三十郎
よねざわ
米沢市長(山形県)

司会・コーディネーター

ほそかわ たまお
細川 珠生

政治ジャーナリスト

各種講座を通じて、まちづくり活動や文化活動に必要な知識・技術を学ぶ「市民講座」が注目されています。特に地域社会に貢献する人材育成、協働の担い手の育成という観点と、まちづくりへの住民参加意識の高揚という観点から、現在、多くの都市で取り組みがなされています。

今回の座談会ではこのような観点から、市民講座を積極的に実施し、まちづくりに生かしている安部三十郎・米沢市長、多田重美・八潮市長、佐渡斉・四街道市長、儀間光男・浦添市長にお集まりいただき、具体的な取り組みやその効果、さらには課題とその対応策などについてお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

地域の中で、住民たちが
まちづくりについて、
徹底的に議論をする機会を
つくることも大切です。



安部 三十郎
米沢市長(山形県)

充実した講座で人材育成を図る

細川 趣味や文化活動など、多様な学習機会の提供はもちろんのこと、地域づくりを担う人材育成にもつながる「市民講座」の実践。数多くの都市自治体で生涯学習の充実や、市民協働の取り組みの一環として導入されています。

佐渡 四街道市では、八潮市のスタートから3年を経た平成9年に職員を講師とした「生涯学習まちづくり出前講座」を開講。そして、平成11年には、あらかじめ講師登録した市民が指導者となり、学びたい市民をアシスト(手助け)する「生涯学習いきがづくりアシスト事業」(人材バンク)を実施しています。

さらに、平成15年には、生涯学習の視点から自己の充実、市民協働の推進に役立ててもらうことを目的に「四街道市民大学講座」も実施しています。ほかにも、「地域づくりリーダー養成講座」などをはじめ、さまざまな講座・事業を展開しています。なかなかそれらの取り組みが、市民協働に結び付いていかないところに、ジレンマを感じています。

その対策として、平成22年に、地域課題の解決を図るまちづくりの推進エンジンとなるよう、「みんなで地域づくりセンター」を設置しました。まちづくりや地域活動に関する講座を少数制で開くなど、市民同士が集い、交流するサロンとして機能しています。通常の地域活動センターとは一味違った協働の拠点として発展させたいと考えています。

儀間 浦添市では、昭和63年に2年制の「てだこ学園大学院」(てだことは、「太陽の子」の意)を開講しました。対象は60歳以上。3代前の市長が老人クラブのリーダー育成を目的に始めた取り組みです。院生は歴史、文化、政治、経済など、さまざまな分野の講義を受講するほか、琉歌碑めぐり、史跡探訪をはじめとした院外学習を行います。これまで24年にわたり、約800名の高齢者がここで学び、地域のリーダーとして活躍しています。

本日は、市民講座などをまちづくりに生かしている都市の市長にお集まりいただきました。まずは、どのような市民講座を開講しているのか、その内容についてお話しください。

安部 米沢市では平成4年に、生涯学習の実践の場として「米沢鷹山大学」を開校しました。当初は40講座でのスタートでしたが、現在では295講座を開講。染物講座、男性の簡単料理教室など、生活に身近で、それぞれの嗜好に合わせた講座を数多く用意し、市民に学ぶ機会を提供しています。

また、平成18年度からは、この米沢鷹山大学の中で「まちづくり人材養成講座」を開いていきます。協働のまちづくりを学び、地域の財産となる人材を養成することが目的です。

さらに、市民の国際交流と多文化理解の推進を目的に、「国際理解講座」も開催しています。米沢市には、今年で創立102年目を迎え、国際的にも評価が高い山形大学工学部(旧米沢高等工業学校)があります。大学院生も含めて、約3100名が学んでいるのですが、そのうち65名が留学生。この講座では、彼ら留学生などを講師に迎えて、外国の文化を学びながら、交流を深める取り組みを実施しています。本市のような旧城下町は、歴史や資源が多い一方で、地域への誇りが強過ぎるのか、少々閉鎖的で、市民の視野も狭くなる傾向があります。外に目を向ける市民が少しでも増えればとの思いで始めました。

多田 八潮市が「生涯学習まちづくり出前講座」を始めたのは平成6年のこと。今でこそ、「出前講座」は、多くの自治体で取り組まれています。ですが、当時はまったく前例もなく、全国に先駆

その効果を受けて、平成20年には、同じく2年制の「てだこ市民大学」も開校しました。これは16歳以上を対象にした市民大学で、まちづくりを担う人材育成を目的にしています。「コミュニティビジネス・地域振興学部」「健康福祉・スポーツ振興学部」「文化振興・教養学部」「地域・学校支援コーディネーター養成学部」と4つの学部を設け、それぞれ専門的に学習。全74単位

市民の学習意欲の背景には、
行政に任せるだけではなく、
自ら地域の課題を解決したい
という思いもあるでしょう。



多田 重美
八潮市長(埼玉県)

けた事業でした。当初は、市の職員が市民の下に向いて説明する「行政編」のみでスタートしましたが、民間の方々にも協力いただき、「市民編」「民間企業編」「公共機関公益企業編」「教職員編」「サークル編」「行政編ダイジェストメニュー」「子ども編」と、年を重ねるごとに、部門を追加。平成23年4月1日現在、222のメニューを準備できるほど、充実しています。

また、平成15年からは、市民協働の担い手として、活躍できる人材を育成しようと、2年コースの「やしお市民大学」を開校。毎週2時間、年間30回、私から見ても相当高レベルの講義を実施し、毎回レポートの提出も義務付けています。さらに卒業前には、自分たちで課題を設定して、「解決の道筋を探る」「自主研究」も課されます。そのような、極めてハードな内容のため、初めのうちは、本当に市民は参加してくれませんか不安でしたが、まったくの杞憂(きぼう)でした。皆さん、熱心に学んでいただき、知識やノウハウを得て、卒業後は、積極的に市民活動など活躍の幅を広げられています。さらに、平成19年には、まちや行政のことについてより深く知りたいという要望に応えて、大学の教員からマンツーマンで教える受ける1年制の「大学院」も開校しています。

のうち、4分の3以上の取得が卒業の条件で、クリアすれば市独自の「てだこ学士」の称号を受けることができます。2年もの間、席を並べて学習する仲間同士の結びつきも強くなり、卒業してからも交流が続くよう、それが何よりの財産だとおっしゃる方もいますね。

高い市民の学習意欲

細川 いかに地域協働やまちづくりにつなげるか。そうした戦略性を持ちながら、講座の開講、学習機会の提供に取り組んでいらつしやること分かりました。そうした行政の考え、取り組みに対して、一方の市民の側はどのように受け止めているのか、興味がわきます。学習意欲や市民ニーズについては、いかがでしょうか。

儀間 学習意欲は非常に高いですね。浦添市では「てだこ市民大学」を開学させるまでに、4年もの時間を掛けて、各種審議会や市民との対話の中で、高校や大学で学べなかったことを、改めて勉強したい、そして、地域に貢献したいという声、若い方を含めて、数多く寄せられました。

多田 学びたいという意欲の背景には、自分たちで地域の課題を解決したいという思いもあるでしょう。実際、「やしお市民大学」でも、自分たちの生活に直結する環境や福祉関係の講義に人気が集まっています。行政に任せるだけではなく、地域の問題を自分で考えたい。そのような思いを持って、勉強しているのだと思います。同時に、リタイアした市民の中には、改めて地域デビューしたい、地域で活動したいという思いを持っている方も少なくありません。そのような市民が地域で活動する手段として



儀間 光男
浦添市長(沖縄県)

効果的なまちづくりのために、
地域の把握は不可欠。
だからまちの歴史などを学ぶ
「うらそえ学」は必修科目です。

も多いですね。
多田 実は、現在の商工会長は、その就任前、「やお市民大学」に入学し、学習されました。その方が卒業後「商工会長になる前に、市民大学で学んでよかった」としきりにおっしゃるんですよ。これまでも、比較的、行政と近いところで、まちづくり活動を担ってこられた方ですが、「市民大学で学ぶまでは行政のことを知って

も、市民大学を活用してもらいたいと考えています。
安部 行政に物を申したい、新たに施策を提案したいという思いを持つ市民も少なくありません。しかし、これまで行政の中に、それを受け入れる制度や事業はありませんでした。そこで、米沢市では、「米沢鷹山大学まちづくり人財養成講座」を卒業した市民から、身近な地域課題を解決するプランを受け付ける「まちづくりプラン大賞」コンペティション事業を行っています。せっかく学んだ知識をアウトプットしたいという方も多いですから、毎年、多くのプランが集まりますよ。
佐渡 本市でも、地域に貢献したい、まちづくりに参加したいの思いを持つ市民は多いですね。大変素晴らしいことですが、その一方で、私から見ると、少々、個人的な思い入れが強すぎると感じる場合もあります。得てして、その方が属するグループや団体の視点で、市政全体を見るものですから、議論がかみ合わないこともしばしばです。
そうした中で大切なことは、自分たちが住む地域をよく理解することだと思います。その点で、まちの歴史や市政の現状などをカリキュラムとした市民講座は非常に有効ですね。理解が深まれば、より広い視野で活動していただけると思います。

儀間 私もそのように思いますね。特に、浦添市は、那覇市のベッドタウンとして急速に発展してきた経緯がありますから、新住民の割合が高い。そのように新しく市民となった方々に、地域の歴史や現状を知ってもらうことは、なおさら必要なことです。そうした考えに立って

るようで知らなかった」と強調されます。市の実情を知ることが、まちづくりを担う場合でも、いかに大切か。そのことを端的に表していると思います。ですから、私も市民に対して「まずは市民大学に入って、行政のこと、地域のことを学んでください」と強調しているのです。
**市民協働へつなげる
コーディネーターの役割**
細川 市民講座が行政に対する信頼感を高め、市民の協力を促すという面で、多くの効果があるということですね。それでは、その一方で、現在、どのような課題が出ているのか、率直なところをお聞かせいただけますか。
佐渡 課題ははつきりしています。市民講座が、地域協働やまちづくりにダイレクトに結びついていないということです。本来ならば、講座を卒業した市民が市の審議会の委員として活動したり、コミュニティビジネスを立ち上げて、地域を盛り立ててほしいのですが、成果につながるように誘導したいですね。
儀間 成果を挙げるためには、最初のうちは、活躍の場所を市から用意することも大切かもしれません。「てだこ市民大学」の卒業生には、学校支援地域本部事業のコーディネーター、放課後子ども教室における学習アドバイザー、安全指導員、総合計画の公募委員など、一定の役割を与え、活動してもらっています。3期目になる私の目標は「地域力の向上」。そのために、積極的に地域づくりのさまざまな場に、市民大学で学んだ市民に参加してもらっているのです。
佐渡 なるほど、参考になります。もう一つ、わが市の課題であり、重要な存在だと位置付

「てだこ市民大学」では、まちの歴史、文化、行政、教育などを学べる「うらそえ学」を共通必修科目に据えています。
行政に対する理解が深まる
細川 実際に市のことを把握すると、市民の行政に対する考えや、対応の仕方なども変わってきますか。

「てだこ市民大学」では、まちの歴史、文化、行政、教育などを学べる「うらそえ学」を共通必修科目に据えています。



佐渡 斉
四街道市長(千葉県)

ヤル気と能力のある
市民をつなげ、
地域課題の解決へと促す
コーディネーターの
存在こそが重要です。

多田 それは変わりますよ。市では、やお市民大学・大学院で学んだ市民に、臨時職員という形で市役所の業務を行う「市政推進員制度」を導入しています。市民の目線を持ちながら、市政を執行する「市政推進員」という立場で、窓口対応も行う。その経験を今後の市民活動に生かしてもらおうと始めました。私はこれを「究極の情報公開」とも考えていますが、働いた市民の多くが「予想以上に市の業務は忙しいんだな、大変なんだな」と、市役所の仕事や職員の働きぶりを見直すようです。
安部 先ほど、「米沢鷹山大学まちづくり人財養成講座」では、市民提案を受け付けると申し上げましたが、近年はさらに一歩踏み出し、優秀なプランに補助金を出して、具体的に市民に実施してもらう仕組みにしています。これまでは提案して終わりという、責任を伴わない形だったため、夢物語のような提案もありましたが、より現実的に地に足がついたプランが多くなりました。一様に、プランをつくり、実施する過程で、「いかに行政は大変な作業をしているのか」と感じられるようです。
儀間 いろいろ行政について学んでいくことで、「市の内部を知り過ぎた。知り過ぎたせいで、物が言えなくなった」と冗談めかして話す市民もいます。市の事情や、事業の目的などを理解してくださることで、われわれのよき味方、パートナーになっていただくことも珍しくありません。うれしいことに「てだこ市民大学」で学んだ市民が率先して「行政というのはこういうことに配慮しているんだよ」「実はこういう仕組みになっているんだよ」と市役所の側に立って、周囲の住民に説明して下さるケース

促進させる上でポイントだと認識しています。その解決策として、「みんなで地域づくりセンター」には地域づくりリーダー養成講座を受講した3名のコーディネーターを置いているのですが、通常の市民活動センターのような相談業務や情報収集業務だけでなく、地域課題を市民活動団体に働き掛け、解決を促すようなコーディネーター業務にも取り組んでいます。
安部 本市でも同じ課題を共有しています。「米沢鷹山大学」の事務局は市民が担い、スケジュール調整や、講座の準備などを行っています。地域全体の絵を描きながら、「あの団体とこの団体を結び付けて、こういう課題の解決に当たってもらおう」といったコーディネーターはまだできていません。



けていっているのが、まちづくりのエンジン役となるコーディネーターです。
地域にはさまざまなスキルを持った市民やグループがたくさん存在しています。しかし、それぞれがばらばらに動いていて、一つの大きな力になっていません。ヤル気と能力のある市民をつなげ、地域課題の解決へと

促すコーディネーターの存在こそが、協働を推進させる上でポイントだと認識しています。その解決策として、「みんなで地域づくりセンター」には地域づくりリーダー養成講座を受講した3名のコーディネーターを置いているのですが、通常の市民活動センターのような相談業務や情報収集業務だけでなく、地域課題を市民活動団体に働き掛け、解決を促すようなコーディネーター業務にも取り組んでいます。
安部 本市でも同じ課題を共有しています。「米沢鷹山大学」の事務局は市民が担い、スケジュール調整や、講座の準備などを行っています。地域全体の絵を描きながら、「あの団体とこの団体を結び付けて、こういう課題の解決に当たってもらおう」といったコーディネーターはまだできていません。
儀間 浦添市には、300以上もの市民サークルがあります。詩吟やお琴、フラダンス、三味



細川 珠生
(政治ジャーナリスト)

線など、文化サークルが多いのですが、確かにそれぞれの団体が、もつと有機的につながれば、さらに地域力は高まるのではないかと思います。

ただ、それには時間が掛かります。さらに、いくら講座を受けて、コーディネート知識を得ても、そのコーディネーターを務める方が地域の中で人間関係を形成していなければ、それを生かすことはできません。「てだこ市民大学」では、地域イベントに参加する「地域参加活動」も必修科目に位置付けているのですが、これも地域に積極的に出て、顔売ることが何よりも大切だと考えているからです。

多田 「やしお市民大学」では、学生は積極的に職員のアドバイスを受けるようにと指導しています。そうすると、職員とは非常に密接になります。一方で地域の中ではまだ人間関係ができていないという例も散見されます。

ですから、市民大学を卒業した市民は、非常に張り切って、「市長、何をやるべきでしょうか」と聞いてくるのですが、「できることからやっただ方がいい」と話しています。家の前の掃除を

して、隣の人とコミュニケーションを取るとか、そういう地道な活動を続けて、地域の中で信頼感を得ることが意外と大切なことなのです。

安部 地域の中で、住民たちがまちづくりについて、徹底的に議論をする機会をつくることも大切ですね。実は米沢市では、来年度から地区ごとで、住民主体の特色ある地域づくり事業を展開します。全地区に同額の予算配分をしますが、取り組み内容は、住民同士が話し合って決定します。その過程で、「自分たちの地区のよさは何なのか」「それをどのように磨き上げるのか」など、住民同士で何度も討議を重ねて、事業計画を立てるのです。既にモデル地区で実施しましたが、非常に地域づくりの機運が高まっています。

儀間 市民のつながりの希薄化、コミュニティの崩壊などが指摘されていますが、いざとなったらつながり合うのが、私たち日本人。それが証明されたのが東日本震災でした。日本人が潜在的に大切にしている「絆」を、まちづくりにぜひ生かしていきたいですね。

佐渡 若者は地域に関心がないともいわれていますが、「みんなで地域づくりセンター」がフェリスブックなどで呼びかけて、定期的に集まって活動する若者やママ友のグループも誕生しました。そのような若者の力も、ぜひ地域づくりに生かしていきたいと考えています。

細川 市民講座というと、カルチャースクールや趣味の集まりというイメージがありますが、そのようなイメージを超えた、高度な取り組み、事例をご紹介いただきました。単に必要な知識や技術、ノウハウを教えるだけでなく、コミュニケーションや人間関係の形成も含めて、

いかに地域社会に貢献できる人材を育成できるか、具体的にチャレンジされているところに、市民講座の新しい、発展した姿が垣間見られたような気がします。

今後も、市民講座を起爆剤に、市民参画、市民協働を進め、地域の発展に努めていただきたいと思います。本日は長時間にわたり、ありがとうございました。

(平成24年1月24日、日本都市センター会館にて実施)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は5月号に掲載予定です。

